
呼び寄せで来日したベトナム難民2世のライフストーリー —— 多文化共生社会のための課題を探る ——

Life Story of the Children of Vietnamese Refugees: Exploring the Actual Condition of Multicultural Society in Japan

河先 俊子
Toshiko Kawasaki

Abstract:

This paper reports the results of an analysis of a life story interview with three children of Vietnamese refugees. The three points below are examined to discuss Japanese policy regarding foreign residents and the current status of their integration.

- 1) How did they get through school life in Japan?*
- 2) Perceptions about their ethnicity.*
- 3) Perceptions about the relationship between Japanese people or Japanese society and themselves.*

From the interview data the helpful effects of governmental and private support for foreign children is confirmed. However, in institutional situations such as police stations, hospitals and places of employment they experienced discrimination and occasionally felt inferiority and anxiety stemming from their ethnicity. They pursue carriers that make use of their ability to use the Vietnamese and Japanese languages.

The necessity of further investigation in the interviewing process, relations between interviewer and interviewee, where the story is created was indicated.

Keywords: children of Vietnamese refugees, life story, multicultural society

1. はじめに

1975年5月、小舟に乗って祖国を出たベトナム難民が米国船に救助され千葉港に着いた。日本政府は、彼らを「水難者」として入国させたものの、第3国へ送り出すという措置をとった。しかし、その後日本に到着するボートピープル^{*1}の数は増え続け、難民の受け入れを求める圧力が国内外から高まると、日本政府は、1979年から定住枠を設けてベトナム難民の定住を許可するようになった。そして、2005年までに、8656人のベトナム難民が定住許可を得ている^{*2}。日本に定住したベトナム難民は、祖国から家族を呼び寄せたり、日本で結婚して家族を作ったが、ベトナム難民受け入れから35年以上たった今、難民を親に持つ子どもたちは成人し、その多くは日本で生活している。本研究で対象とするのは、ベトナム難民の親を持ち、呼び寄せで来日後日本の学校教育を受けて成人し、現在も日本に住んでいる人々である。このような人々は一般的に難民2世、あるいは難民1.5世と呼ばれているが、ここでは難民2世と呼ぶことにする。本研究ノートは、ベトナムで生まれ、日本で学校教育を受けて成人した難民2世を対象としたインタビュー調査の結果を報告するものである。

日本社会では近年外国人住民が増え、今後も多くの外国人を受け入れることが予測される。多様な背景を持つ外国人住民の増加に伴って、「多文化共生」が叫ばれ、そのための方策も提案され始めている。日本社会にとって、異言語・異文化の人々をどのように統合していくのかは、喫緊の課題である。この課題を解決し、日本社会を新たに作っていくためには、外国にルーツを持つ人々の定住化プロセスや適応プロセス、生活実態などを明らかにする必要がある。

これに対して主として社会学の領域では、ベトナム難民や日系人などのニューカマーの外国人の定住化プロセスや生活世界が明らかにされている(荻野2013、梶田他2005、川上2001)。また、ニューカマーの子どもたちに関しては、日本の学校生活への適応の問題やアイデンティティに関する研究が行われると同時に、様々なサポートが実践されている(清水2006)。そして、地域の日本語教室やエスニック・コミュニティの重要性が指摘され、学校や行政との連携が模索されている。さらに、日本語教育学の分野では、日本語教育の場をひとつの社会とみなし、そこで日本語母語話者と非母語話者が対等で豊かな関係を築くことを目的とした言葉の教育が実践されている(岡崎2007)。

しかし、難民や移民を多く受け入れているオーストラリアやアメリカで難民、移民2世を対象とした調査、研究が行われているのに対し、日本では、ニューカマーの子どもたちが「子ども」ではなくなった後、すなわち、彼らが学校生活を乗り切った後、日本語を用いて日本人とどのような関係を構築し、日本社会の一員としてどのように活躍しているのかに注目した研究はほとんどない。これは、日本で社会化された外国にルーツを持つ子どもたちを日本社会が正統なメンバーとして受け入れているかどうか明らかになっていないことを意味する。しかし、日本社会の将来を考えれば、成人したニューカマーの子どもたちを日本社会がどのように受け入れているのか、彼らにとって日本社会は十分に能力を発揮できる社会なのかを知ることは、これまでの外国人政策を評価する上でも、これからの統合政策を立案する上でも役に立つと考えられる^{*3}。

そこで、本研究では、呼び寄せによって来日し、日本で教育を受けて成人し、現在も日本で生活しているベトナム難民2世がこれまでの経験をどのように意味づけ、日本社会で自分たちをどのように位置づけて、どのように活躍しているか明らかにする。これによって彼らと日本社会との関係が理解できると同時に、彼らの目から見た社会統合の現状が明らかになると考えられる。

本研究で対象とする呼び寄せで来日したベトナム難民2世は、学齢期に文化間を移動し、日本で社会化されたという特徴を持つ。ニューカマーの子どもたちに関する先行研究では、出身国によって親の学校教育に対する態度が異なり、それが子どもの学校生活や学習態度に反映されることが指摘されている。また、出身国によって生活世界の特性、エスニック・コミュニティの機能などにも異なりが見られる。さらに、川上（2001）は、ベトナム難民は「難民体験」が心理や生活世界に深く影響を与えているという点で、移民とは異なっていると指摘しているが、その子どもたちも親と「難民体験」を共有しており、それ故に、それ以外のニューカマーの子どもたちとは異なる自己認識を持っているかもしれない。このように、親の出身国に加えて、親が難民であるか、移民であるかは、子どもの生活世界や精神を左右する要因となると考えられるため、ベトナム難民の子どもを対象を絞って調査を行った。今後、ベトナム以外の国にルーツを持つ難民や移民を対象とした研究が行われることによって、多文化共生社会ないしは社会統合の実現のために必要な制度や政策を包括的に考えていくことができるだろう。

2. 調査の概要

2015年6月から9月にかけて、ベトナム難民2世の女性3名を対象としたインタビューを行った。最初にインタビューを依頼したのは、筆者の既知の女性であり、彼女から紹介を受ける形で次の女性、さらにその女性の紹介で次の女性というように、スノーボール方式でインタビュー協力者を募った。3名とも神奈川県在住の20代後半の女性であり、南ベトナムの出身者である。そのうち1名はカトリック教徒であった。

インタビューでは来日と定住までの経緯の他に、主として①日本で学校生活をどのように乗り切ったのか、②ベトナム人であることをプラスあるいはマイナスに感じることはあるか、あるとすればどのような時か、③日本人と対等な関係を築けていると思うか、④将来の見通しについて尋ねた。学校生活について尋ねたのは、清水（2006）などで外国にルーツを持つ子どもたちにとって、日本の学校に適応し、高校、大学に進学することは様々な困難を伴うことが明らかにされているからである。また、外国にルーツを持つ子どもたちに対しては、学校内で国際学級や取り出し授業、入り込み授業などがなされているほか^{*4}、地域の日本語教室などで日本語教育や教科学習のサポートがなされるなど様々な支援が提供されるようになったが、これらの支援を当事者はどのように受け止めているのか明らかにすることによって、これまでの支援制度がうまく機能しているかどうか確認できると考えたからである。インタビュー協力者は3名とも高校を卒業しており、2名は大学に進学している。外国にルーツを持つ子どもたちにとって、高校進学が難関であることに鑑みれば^{*5}、彼女たちは日本の学校生活を乗り切ることができた人々であると言えるだろう。

また、ベトナム人であることに対する認識や日本人との関係について尋ねたのは、日本人、日本社会における自己の位置づけやエスニシティ^{*6}がどのように語られるのか分析することによって、ベトナム難民2世の側から見た社会統合の現状を考察できると同時に、ベトナム難民2世と日本社会との関係を理解する鍵概念を得ることができると考えたからである。

インタビューは日本語で行い、所要時間は1時間から2時間であった。インタビューは許可を得て録音し、文字化してデータとした。

3. 来日と定住の経緯

本研究ノートでは、インタビュー・データのうち、学校生活についての語りの部分とベトナム人であることについての語りの部分、日本社会における自己ないしは在日外国人について語られた部分に注目し、どのような内容がどのように語られたのか分析して報告することにする。語りの内容は、協力者の表現をできるだけ生かして筆者が要約したが、語り口調や語彙の使用で特徴的と思われる部分に関しては、語りをそのまま引用した。

まず、はじめに、それぞれの協力者の来日と定住の経緯について説明する。

3.1. ニィ（仮名）の場合

難民として来日していた父の呼び寄せで、1995年、10歳の時に母と兄と一緒に来日する。来日後、大和市の難民定住促進センターに申請するが、1、2ヶ月待った後で入所した。待っている間は、叔父のところに一緒に住んでいた。出所後、小学校5年の夏休みにA小学校に入学するが、6年生の時、引っ越しにともなってB小学校に転校した。C中学校、D高校を卒業し、私立のE大学に入学。卒業後、中学校2年生の時から通っていた地域のK日本語教室で外国籍の人々の生活支援に携わっている。父親は何回か職場を変わりながらずっと自動車関係のプレスの仕事をしており、母親は電子部品の検査の仕事を10年近くした後、鉄くずを計ったり組み立てたりする仕事をしていた。アメリカとデンマークにも親戚がいるが、会いに行ったりすることはない。

3.2. マイ（仮名）の場合

2002年の春、15歳の時、81年に日本に来ていた姉の呼び寄せで来日。品川国際救援センターで6ヶ月くらい日本語を勉強してから、姉と一緒に住むようになり、その後引っ越す。高校には入らないで、仕事をしていていたが、2008年、21歳の時にF定時制高校に入学。仕事をしている間はボランティアの日本語教室に通っていた。4年間かけて卒業後、G私立大学経営学部に進学。両親も一緒に来たが父親は日本語がわからなくて仕事もできない、日本はつまらないと言って帰国した。大学に入る前は3、4年に1度くらい帰国していたが、大学に入ってから1年に3、4回くらい帰っている。日本とベトナム以外に家族はいない。現在4年生で就職活動をしているが、日本で就職するか父のいるベトナムに帰るか迷っている。

3.3. アン（仮名）の場合

父が先に難民として日本に来ていて、生活が安定した後、2003年6月、13歳の時、呼び寄せられて来日。母はベトナムにいて、兄弟はそれぞれ家族を持って日本とベトナムに住んでいる。あまり会う機会がないが電話やSNSで連絡を取っている。父に誘われた時、最初はベトナムにずっといた方がいいかなと思ったが、「お父さんがいるから行っちゃおう、やっぱり日本に行った方がいい」と思って来日を決意した。来日後、学校に行かず、9ヶ月くらい自宅で過ごし、ボランティアの日本語教室に行ったり、教会のシスターに日本語を教わったりした。その後、国際救援センターに入所。日本語もまだまだで、ベトナムで中学校を卒業しなかったため、H夜間中学に入学。卒業後、F定時制高校に入学、そこでマイに出会う。高校卒業後、1年間F定時制高校のスクールアシスタントとして後輩のベトナム人学生の支援をする。その後、コンビニでアルバイトをしながら、K日本

語教室で翻訳や通訳のアルバイトをしていた。そして、ハローワークでベトナム人研修生の支援をする会社を見つけて就職するが、数ヶ月で退社。今は祖母の友達に紹介されたツアーコンダクターの仕事をしている。また、F 定時制高校の先生の手伝いも続けている。

4. インタビュー・データの分析結果

次に、学校生活に関する語りを見ていく。

4.1. 学校生活に関する語り

(1) ニィの場合

A 小学校では、外国人の生徒が自分と小6の兄と2人だけだったが、取り出し授業が行われた。取り出し授業の先生はいろいろ相談に乗ってくれた。「いじめ」にあっていたがその先生に相談したら、担任の先生に言ってくれて、担任の先生がクラスみんなに話して、なんとか仲良くなることができた。ベトナムにいた時は小学校2年生までしか勉強していなくて、九九とか全然覚えていなかったのが全部小5の時にやった。水泳、体育、音楽もやったことがなかったので、先生に手伝ってもらった。

B 小学校では、ベトナムの子が1人と中国の子が2、3人いたが、取り出し授業をはじめ学校側からのサポートは全くなかった。でも、日本の学校は勝手に学年が上がっていくので、「大丈夫だったのか微妙だけど」普通に過ごした。クラスメートとはあまり話もせず、接したりもしなかった。

C 中学校に上がれば友達ができるかと期待していたが、中学校も小学校もあまりメンバーが変わらないのでそんなに友達はいなかった。ただ、中1の時、中国の子とカンボジアの子と仲良くしてもらった。中2に上がってからは、1学年上のベトナムの子と仲良くなり、その子に誘われて地域のK日本語教室に行くようになった。その前は、引っ越す前の場所にあった地域の日本語教室に毎週欠かさず行き、日本語や教科の勉強をしていた。中3に上がってからは、ベトナムから日本に来たばかりの子がいて、その子と割と仲良く過ごした。その間に、もう1人ベトナムの子と仲良くなった。

日本人と仲良くなるのは難しかった。高校ではちょっと「いじめ」があった。高校に入学した時は、友達を作ろうと思って、頑張って話しかけたりもしていたが、やっぱり日本の子は日本の子たちで固まってしまって、一緒にいるのは違和感を感じた。中学の時も高校の時も日本の子とは少し壁を感じて、なかなかじめなかった。高2に上がってから転入生がいて、その子とは割と付き合いがあって、ちょっと仲良くした。

高校受験は、全部地域のK日本語教室のNさんにお世話になった。親は学校の面談に行かなければならないことが分からないし、親の仕事が忙しいので、来てとは言いがらかった。そういう時はNさんに親の代わりに面談に行ってもらった。高校受験の時も担任の先生との話し合いも間に入ってもらった。大学についてもNさんが調べてくれて、学校見学も一緒に行ってもらった。Nさんがいなかったらどうなっていたかと思う。

ニィは、日本人と親しくなることは難しく、外国籍の子どもや転校生と仲良くしていたと話しているが、これはニィが日本の学校の中で周辺化された存在であったことを意味している^{*7}。また、いじめにあったこと、体育や音楽といったベトナムにはない科目、ベトナムとのカリキュラムの違い

い、親子面談といったベトナムにはないシステムに戸惑ったことを語っているが、そういった外国籍の子ども特有の問題の解決にあたって、取り出し授業の教員、地域の日本語教室のスタッフの支援が不可欠だったことが分かる。外国籍の子どもの支援に関して、ニィはB小学校もC中学校も「ダメだった」と語っているが、外国籍の子どもたちが学校生活を乗り切るために、地域の日本語教室が欠かせない存在であったことがうかがえる。

(2) マイの場合

来日後すぐに高校に行きたいという気持ちは少しはあったが、元々勉強が苦手で、日本語もそれほどわからなかったので、母国語でもできないのに、日本語で勉強するとどうなるかすごく不安で、すごく悩んで、学校に行くことをやめた。でも職場でベトナム人のちょっと年上のお姉さんと出会って、「まだ若いのになんで学校に行かないの、もったいないよ」と何回も言われた。「受験するのに基礎的な知識がないから、受験できるわけない」と言ったら、数学なら教えてあげられると言われ、休憩時間を使って教えてもらった。

姪や国際交流センターで一緒に日本語を勉強した友達がF定時制高校の出身だった。また、F定時制高校には外国人枠があり、面接と小論文だけで入学した。

F定時制高校では、1年目は取り出し授業でみんなは国語と地理と歴史をやっている時に外国人たちは日本語を勉強した。2年目からはそれに加えて外からコーディネーターの人が週に1回来て、困ったことがあったらその人に相談すると解決方法を探してくれた。3年目は取り出し授業はない。大学見学に行く勇気がないと言ったら、コーディネーターの人が一緒に行ってあげるといふようになって、助かったと思う。また、高校生の間は、地域の日本語教室にも通っていた。

F定時制高校には様々な国籍の人がいたし、同じくらいの歳の人もいたので違和感がなかった。いじめは全くなかった。

家が近く帰国子女枠があったのでG私立大学を受験した。会社で働いていた時に、給料の面で少し不満があったので、給料はどうやって決められるのか関心があって経営学部を選んだ。他のゼミ生は若いので子供っぽいと思うことはあるが先生とは個人的な付き合いというか、よく会話できたり、相談しやすい関係になっている。

マイはニィとは異なり、先に来日していたベトナム人から高校についての情報を得ている。また、高校ガイダンス、外国人枠といった制度を利用している。マイが来日したのはニィより7年遅い2002年であるが、その時にはベトナム人コミュニティが情報提供の役割を果たすようになり、日本の地域社会でも外国籍の子どものための教育支援制度が用意されるようになっており、それが機能していたと言える。また、マイからはいじめの経験は語られず、高校で周辺化されていた様子もうかがえなかったが、これは日本社会のマジョリティーではない多様な背景を持った人が集まるという定時制高校の特色であると考えられる。

(3) アンの場合

来日した後、父からあいうえおを教えてもらい、その後父の知り合いの日本語の教室に通った。難民2世が開いた日本語教室だった。その人のことはすごく尊敬している。すごい方で自分の力で

すべてゼロからやって今、他の人と一緒に会社を開いている。日本語はずっと話す機会がなかったが、中学校に入って先生と友達と話すようになった。また、バイト先では日本語を使わないといけないので自然に話せるようになった。

救援センターを出た後、仕事をしていたら、シスターが夜間中学のことを調べてくれた。また、F 定時制高校もシスターに勧められた。

いじめの話聞いていたので、夜間中学校に入学した時はちょっと怖かった。また、日本語も分からないので心配だったが、夜間中学校は自分が考えていたのと全然違っていて、日本人の子がいなかった。いても戦争中で中学校に行けなかった年配の人。それで、みんなとすぐ仲良くなって、毎日、日本語はお互いにそんなに上手ではなかったが、少しずつ話して、日本人の学生にもいろいろ教えてもらって、少しずつ自信を持つようになった。中学校は毎日楽しく過ごした。

中学校では日本語の授業はなかった。普通の国語の授業の中でたまに先生が日本語の勉強のプリントを入れたりした。高校では取り出し授業があったが、入学した時にはそれを知らなかったのも日本人と同じクラスに入った。日本人だけだと、話したくても全然言葉が出ない。分からない時も何回も聞くとすごく恥ずかしいし、迷惑をかけたくないので、聞かなくなった。先生に何回も聞くのも気が引けたので、そのまま放っておいたら、勉強も全然ダメだった。ついていけなくてストレスがたまって、やめようと思ったが、ベトナム人の友達に何回か声をかけてもらい、多文化教室に連れて行ってもらった。多文化教室では先生に相談に乗ってもらったりして、気分も明るくなった。

中学校の時はボランティアの教室に通って、日本語と教科の勉強をしていたが、高校に入ってからバイトが忙しくて行かなくなった。

アンもマイと同様に先に来日したベトナム人のコミュニティーから学校に関する情報を得ている。特にアンの場合は、カトリック教徒のコミュニティーからの支援が大きい。アンは夜間中学、定時制高校に通っていたが、どちらも外国籍の子が多く、多様な背景を持つ学生が在籍しているため、いじめの経験が語られることはなかったと考えられる。しかし、定時制高校1年次に日本人クラスに在籍していた時は、少数派であり、日本語非母語話者であるため、声を出すことができず、サポートを受けることもできなかったため、学習に支障をきたしていたことが語られていた。このことから、非母語話者であり、少数派であること自体に対して、配慮や支援が必要であることが示唆される。

4.2. ベトナム人であることに対する認識

次に自分がベトナム人であることについてどのように感じているかについての語りを見ていく。

(1) ニィの場合

お弁当が悲惨だった。日本人の子のお弁当は綺麗なのに、自分のは豚足2つとかだと、恥ずかしくて隠しながら食べた。

必死に努力してベトナム語の勉強をした。高校3年生の時から日本語教室で翻訳の仕事をしたり、ベトナム人に対してベトナム語を使って日本語を教えたりした。

ベトナムの背景を持っているということは、今はプラスだと思っている。中学校の時は、自分って何だろうと考えて一番辛かった。高校に入ってからもうすごく考え込んでいたが、別にいいかなと

思うようになった。ベトナムにいた時間もすごく大切だったし、楽しかったのも、それに対してそんなに自分を責める必要はないし、責めてもしようがないし、それを踏まえての今だと思う。多分今がそんなに悪いとは思っていないので、日本に来たことを後悔しているわけではない。やっと自分を受け入れて、そのままだの自分でいいじゃないかと思い始めている。

アルバイトをしようと思って、タウンワークを見て電話をした時、最初は丁寧に話したりすると、向こうもすごく乗り気でいろいろと聞いてきたりしてくれるが、名前を言った瞬間に、あ、けっこうですと言われて電話を切られる。1カ所ではなく、何カ所も。そういう話は、確かに他の外国籍の子たちからいろいろ聞いてはいたが、実際に自分がその目にあうと本当にきついなと思った。「日本社会ってまだまだ外国人わかってねえな」と思った。

ベトナム人だと意識してしまうというよりは、日本人じゃないなと思う時はある。家の中で使っているような言葉が良くわからないことがあって「しゃべっててわかんない日本語があると、まだまだだな」と思う。「日本人つえー」と思った。

大学1年生の時、一番最初にベトナムに帰った時、ここは外国だと思った。短期間いることはあっても生涯ベトナムでは暮らしていけないと思う。

ニィは10歳の時に来日しているせいか、マイやアンとは異なり故郷のベトナムを「外国」であると感じている。しかし、非常に高い日本語能力を有しているにもかかわらず、分からない日本語があると感じており、「まだまだ」「日本人つえー」という表現から日本語母語話者に対する劣等感を持っていることが分かる。ニィのように人生の半分以上を日本で過ごし、日本の大学を卒業してもなお、日本語に不安を抱えていることは特筆すべきである。

ニィは筆者と既知の間柄であり、基本的にはです・ます調で話していたが、過去を回想する時には「～だったかな」「～だったな」「～かな」のように、砕けた文末表現も頻繁に見られた。また、上で直接引用した「つえー」「わかってねえな」という若干乱暴な表現は、日本人に対する感情を吐露する時に使われ、印象的であった。これは、日本社会と自己との間の溝を表しているように思われる。

しかし、ニィは日本で外国人に対する就業上の差別を体験し、「損をしている」と感じながらも、現在はベトナム人であることを肯定的に受け止めている。これは、後でも述べるように、ニィが現在ベトナム語を生かした仕事についているからではないかと考えられる。ベトナム人であることの証とも言えるベトナム語を保持し、それが職場で認められていることも、エスニシティに対する肯定感を支えているのではないだろうか。なお、ニィはベトナム語を自然に保持したわけではなく、保持、上達のために努力した上に、K日本語教室でベトナム語を使って仕事をする機会が与えられた結果、保持できていることにも注目するべきであろう。

(2) マイの場合

ベトナム語は全然忘れていない。日常会話だと全然支障はない。

ベトナム人で名前がカタカナ表記だと仕事を探す時にやっぱりうまくいかない。

今でもやっぱり自信がない。例えば事務職の仕事につきたいと思っても、事務職だと私と日本人と比べたら日本人の方とるんじゃないのかなという考え方、そういう先入観のようなものを持って

しまう。だから、したくてもなかなかそういう方面にはいけない。日本人の子と私がいたら、日本語も日本人と比べたらあまり上手ではないし、歳だし、そしたら日本人を採用すると思ってしまう。でも、ベトナム語ができるということが自分の強みだと思っているので、ベトナムと関わる会社を探して応募している。

ベトナムに帰ってもベトナムの企業に入るかという入りたくない。待遇もそうだが、日本のやり方のほうがいいかなと思う。こっちに慣れるとやっぱりベトナムのやり方は、慣れない。

ゼミでベトナムの少数民族の子どもたちのためのプロジェクトをやった時、自分がベトナム人だということが、ベトナムを選択したきっかけになって、プロジェクトのリーダーを務め、ベトナムの現地に案内したり、計画を立てたりした。ベトナム人であるから、そういうことができて、ちょっと貢献できたのかなと思う。

マイは16歳で来日しているせいか、ベトナム語が失われていないと認識している。そして、ニイのようにベトナムを外国と感じることはなく、帰国するか日本で就職するか迷っている。ニイと同様に日本語がネイティブではないという点に不安を抱えているが、ベトナム語ができることは自分の強みだと感じている。これは、大学でベトナム人でありベトナム語ができることによってプロジェクトのリーダーとなったというように、自分のエスニシティが認められた経験に裏打ちされていると考えられる。

(3) アンの場合

F 定時制高校卒業後、進路に迷っていたところ、高校の先生にスクールアシスタントの仕事を頼まれた。不安が大きかったが、先生方にできるから選んだと言われてやってみた。やってみたらやっぱり自分が他の人に何か力になれて、自分も少し役に立つんだと思った。その前は、他の人のためにやるとは全然思っていなかった。そこからやっぱり自分もっと日本語を勉強して、普通の工場で働いてお金を稼ぐより、少しベトナム人の力に、日本語が分からない人の力になればいいなと思うようになった。そして、日本語とベトナム語を生かせる仕事中心にして探した。

アンも13歳で来日したためかベトナム語は失われていないと認識している。アンは高校卒業までは被援助者としての経験しかなかったが、卒業後、後輩のベトナム人を支援する支援者としての役割を果たすことによって、日本の学校生活を乗り切ったベトナム語話者としての自己の価値が認められる経験をしたと考えられる。この経験が、その後のベトナム語と日本語を生かして、ベトナム人の力になる仕事を探す原動力になっていると考えられる。

4.3. 日本人、日本社会との関係に対する認識

(1) ニイの場合

大学の就職関係の部署に行って相談したら、君は外国人だから留学生と一緒にやりなさいと言われた。私は特に制限されるようなこともないと思っていたが、留学生たちと同じ説明会みたいなのところに行った方がいいと言われたので、どうしても納得がいなくて、日本社会に対して少しがっかりした。でもそれに対しては、しょうがないと思っている。「わめいてもしょうがないし、自分

でできることやるしかない。」

ベトナムに帰国して日本に戻って来る時、私としては日本に住んでるし、日本人同然に扱ってもらってもいいと思うが、外国人のゲートの方に入らなければならないのは、ちょっと納得がいかない。自分としては、一市民だと思っている部分がないわけではないので。

日本は特に仕事に関しては外国人を受け入れないことが多いと思う。外国籍の人ができる仕事とできない仕事があるから、しょうがないって言ったらおしまいだが、外国籍の人でもできる仕事を単に外国籍だからダメというのは違うと思う。

通訳として病院に行くと日本人に対してはすごく丁寧に説明するのに、外国籍の人に対してはすごく適当だ。説明もちゃんとしようとしないうし、ちょっとしゃべったらあとで言ってみたいな、そういう態度。でも、日本人と同様に外国籍の人だってお金を払っているわけだから、ちゃんと時間を割いて、患者さんと向き合わなきゃならないといけないじゃないかと思う。

ニィは3人のうち最も若年で来日し、居住期間も長いため、日本社会の正統な構成員であるという意識が強いと思われる。しかし、日本社会には彼女のように日本で社会化され、日本で活動する外国籍の人々を日本人と平等に待遇する制度が整っておらず、それが問題化されている。さらに、日本に暮らす外国籍の人々に対しては、就業上及び病院での差別的な待遇があることも問題化されている。彼女の両親も長く働いているものの正社員にはなっていない。両親世代は日本語の問題もあるとニィは言っているが、日本語ができるからといって待遇の改善には繋がらないことも指摘していた。しかし、こうした問題点に対しては、たいていの場合、「しょうがない」として諦めていることが分かる。

ニィは自分が学習支援などを受けたK日本語教室の代表に手伝ってと言われて、K日本語教室に就職したが、「自分の能力生かせるなら、自分を必要としているところがいいかなと思う」という。そこではベトナムから来た人々を対象とした日本語教室やベトナム語での情報発信、生活支援など地域に暮らす外国人住民のための幅広い支援活動に従事しているが、自分の難民2世としての経験から、「親は書類の書き方とかが分からないので、日本語がわかる子どもに全部負担がかかる。生活相談は親たちも必要だし、子どもたちにとってもいいことだと思うので、この活動は悪い活動じゃないと思う。どこまで続けていくかは別として、今のところはやっていこうと思っている。」と語った。

ニィは日本社会に軸足を置きながら自分のエスニシティが認められるような場を求めており、ベトナム人の日本定住を支援する職場がそのような場のひとつとなったと考えられる。

(2) マイの場合

パジャマ姿で2人乗りでバイクを運転していた時に警察に捕まった。近くだったから免許を持っていなかったの、取りに行くから待っていてほしいと言っても信用してくれなかった。それで名前でいうから免許証を確認してくださいと言ったら、1人の人は、お願いしますと言ってくれたが、もう1人は言っても調べられないでしょとすごく嫌な言い方をしてきた。それで、姉の免許を預けて、私が自分の免許を取って来るまで待っていてもらったが、それでも信用してくれなかった。免許を取りに行く時にも、逃げないでねと言われて、外国人だからそういう扱いになったんじゃない

のかと思った。

警察の態度は日本人に対してはどうか分からないが、事故の通訳をする時は、こちらが被害者なのにすごく怒鳴られる。言い方がすごく嫌で、私は被害者なのになんでそういうふうに使われないといけないんだろうとよく思う。日本人に対しては、事故の加害者なのにすごく丁寧な言い方をして、こっちはなんかすごく怒られているみたいな雰囲気なので、警察に行くのは嫌だ。

16歳の時にクリーニング屋さんでアルバイトをしたが、多分未成年だから、仕事はやらせるけど、給料の中から20%はとっちゃうっていう話になって、1年半くらい、そういう状態が続いていた。当時は来たばかりで、相談できる人もいなくて、頼りにできるのは姉しかいなかったが、姉も仕事さえあって生活でできればいいと思っていたと思う。でもこれはすごく不公平でひどいことをされたと思う。今思うと訴えたいくらいだ。

日本人の性格は分からないが、だいたいミスがあってお前だろと言われて、私じゃないと言っても信じてくれない。その場合は日本人だとあまり口答えはしないと思うが、私たちは黙ってられないから、自分がやっていないことは認めるわけにはいかない。それで、反論したらいろいろ言われる。そういう悔しいことがたくさんあった。

マイもまた就業上及び警察での差別的な扱いを問題化している。職場や警察、病院が不平等な場面として問題化されやすいのは、ただでさえ雇用主对被雇用者、警察対市民、医者对患者といった制度的な役割に基づく権力関係が存在しているところに、マジョリティー（日本人）対マイノリティー（外国人）という関係が重なり合い、二重の権力関係が露呈するからではないかと考えられる。そして、マイの語りからも分かるように、外国籍の住民の立場からは、この権力関係は、外国人に対する差別と受け止められる傾向がある。

マイが日本人との間に権力関係を感じていたことは、マイの日本語の用法にも現れている。マイと筆者は初対面であり、年齢も離れているので、過去を回想する時に、「～たかな」などがしばしば使われている以外は、です・ます体であったが、日本人が自分たちに発した言葉を引用する際には「お前だろ」「知ってるのか」のようにぞんざいな言い方が選択されていた。

マイは高校に入る前に会社勤務もしているが、「私たちベトナム人は派遣会社を通じてその会社で働いたから、その会社とは全く関係ないというか、派遣されて仕事をするだけという環境にあった」と話している。梶田他（2005）では、日系ブラジル人に関しては市場媒介型の移住システムが機能し、それが彼らを不安定就労部門に押しやり、日本社会から隔離していることが指摘されているが、ベトナム人に関しても同様の移住システムが存在している可能性がある。

様々な不平等を経験しながらもマイは、将来的に日本人と対等な関係になれると思うと語っていた。

(3) アンの場合

ベトナム人だから得をした、あるいは損をしたと覚えることはあるかという問いに対して、アンは、日本では外国人だから注目されていて、自分の言葉もあり、日本語もできるので「いいところだけ」と語った。アンからはニィやマイのように日本語に対する不安や劣等感は語られなかったが、これはアンが就職活動や日本の会社での仕事のように日本人と競合する経験がないためだと考えられる。

外国人だから損をしたのは、アルバイト先で日本人のやり方が分からない時に、お客さんに外国人だからわからないと言われたり、自分が伝えたいことははっきり伝えられなくて誤解されて、外人だって言われた時くらいだ。その時は「ちくしょう」と思った。でも、日本の社会は、自分の能力より、自分の国の人を優先する社会だと思うので、もしもっと大きな社会に出たら、外国人だから損をしていると感じることが多くなるかもしれないとも語った。アンも私と初対面であり、年齢差もあるため終始です・ます体で話していたが、その時の日本人に対する感情を「ちくしょう」という言葉で表したのが印象的であった。

現在アンはツアーコンダクターとして主にベトナムからの観光客を案内する仕事に従事しており、ベトナム人と接しベトナム語を使う機会があることに充実感を覚えている。これは、アンが日本に居住しながら祖国を向いて仕事をしており、そこでベトナム人でありながら日本語ができることが正当な評価を受けているからだと考えられる。

5. 考察

上で示した語りから日本の外国人政策、統合政策に関して次のような示唆を得ることができる。

まず、マイは進学ガイダンスやコーディネーターの存在が、高校、大学進学の上で役立ったと語っていた。これは、地域社会が提供している外国につながる子どものための教育支援策が機能していることを示していると言える。しかし、3人の語りからは、少数派である故に、また日本語非母語話者である故に、言いたいことが言えず、日本人が多数派を占める環境では周辺化されてしまうことが明らかになった。また、ニィの語りからは、日本の学校では当たり前とされる科目や学校行事に困難を感じていたこと、お弁当など日常生活上の差異からエスニシティに対して否定的な感情を持つことが分かった。清水（2006）では、学校では担任の教員が「やれている」という判断を下せば、平等主義の下に日本人児童と同様に扱われるが、「やれている」というのは学校生活に適応しているという意味で、学習内容を理解しているかどうかは問われないため、本人は「分からない」と言える場を失って不安な毎日を送り、学習不振に陥ることが報告されている。これと同様のことは、3人の語りからも確認された。「やれている」かどうかに関わらず、学校内で少数派であること、日本人との異なりを意識せざるを得ない存在であること自体への配慮が必要なのではないだろうか。

子どもの言語能力はその環境での日常生活に必要な生活言語能力と、認知的な負荷の高い教科学習などに必要な学習言語能力に2分されるが、一般的に前者の習得には1から2年かかる一方で、後者の習得には5年以上かかると言われている。これに加えて、日本語能力が高いニィでさえ、母語話者に対して劣等感を持っていることに鑑みれば、日本語非母語話者であること自体に対しても配慮が必要であるように思う。

定時制高校、夜間中学のように外国籍の子どもをはじめ、多様な背景を持つ学生が集まる学校に通ったマイとアンは、自分のエスニシティに引け目を感じることなく学校生活を送った。また、マイは大学で自分がリーダーとなってベトナムの少数民族の子どもたちを支援するプロジェクトを実施したことに対して、ベトナム人であることが役に立ったと感じている。外国にルーツを持つ学生が周辺化されず、エスニシティに対する自尊感情を維持するためには、多様性が認められるような環境や彼らが中心となるようなプログラムの開発が役に立つことが示唆された。

一方、特に学校生活について語る時、3人に共通している用語法として「～てくれた」「～てもらった」の多用が挙げられる。例えばニィは、「取り出し授業、わざわざ作ってくれました。」「カンボジアの子と仲良くしてもらった」「相談にのってもらった」のように表現していた。また、アンも「日本語教えてりしていただいて」「いろんな方に（中学校を）探してもらって」と語り、アルバイトに関しても「雇ってもらった」と語っている。この用語法は、彼女たちが自分自身を被援助者として位置づけていることを示している。彼女たちを被援助者たらしめているのは、その「外国人性」である。だからこそ、他者の役にたつ経験、「外国人性」が価値を持つ環境が彼女たちの自尊感情を支えていたのではないだろうか。

彼女たちは3人とも日本語を習得する一方でベトナム語を保持しており、それを自分の強みであると認識していた。2つの言語を持っていることもまた彼女たちの自尊感情を支えていると言える。そして、ベトナム語と日本語の両方を生かすことのできる仕事を得るか、そういった仕事を探していた。ニィとアンはベトナムから来日する人に対して日本での滞在や生活をサポートする役割を、マイは日本からベトナムに行く学生のベトナムでの活動を指導する役割を果たしていた。3人ともベトナム人と日本社会、ベトナム社会と日本人の間に自分の生きる世界を見出していると考えられる。こうした生き方が可能になる背景として、研修生、留学生、定住者、旅行者といった形で来日するベトナム人が増加していることが挙げられる。また、ベトナムの政治的安定や経済発展に伴って、ベトナムから日本を訪れる人のみならず、日本からベトナムに行く人も増加しており、ベトナム語の需要が高まっていることも挙げられる。こうした社会的文脈は、今後もベトナム語の価値を高め、ベトナム難民2世がベトナム語と日本語を併用して働く場を提供すると思われる。

しかし、彼女たちのようなベトナム人が増えることは、「多文化共生社会」の実現、つまり日本人と外国人がお互いに理解しあい対等な関係を築く社会の実現につながるだろうか。確かに、ニィの活動は、ベトナム人住民のスムーズな日本生活を助けるであろう。しかし、ベトナム人どうしが助け合うことで、そこで世界が完結してしまい、日本社会の中でベトナム人コミュニティを隔離する方向に進めてしまう可能性もある。ニィも支援が受けられる場があるのは重要だが、それによって自分では何もしなくなってしまう、日本語も習得しなくなってしまうことを危惧していた。アンの仕事にしても、日本社会でベトナム人はベトナム人を対象としたビジネスに従事するというようにベトナム人をベトナム人どうしの関係に閉じ込めてしまう可能性がないわけではない。

一方、先住のベトナム人が新来のベトナム人を日本へ同化させる圧力の一翼となる可能性も否めない。警察や病院における外国人差別が問題化されていたが、彼女たちが通訳を担い日本人の立場を代弁することによって、差別を再生産する可能性すらあるのではないだろうか。

このように考えると、ベトナム難民2世と日本人の機会均等、差別禁止、経済的、社会的、文化的生活における平等を実現するためには、彼女たちの「強み」であるベトナム語と日本語が必要とされる職場があるだけではなく、彼女たちが日本人、日本社会との関係における不平等を問題化し、クレーム申し立てをする場や制度を作ることも必要であると考えられる。彼女たちの声が日本人側に届くことが、日本人側が差別の存在を自覚し、是正へと向かう一歩となるのではないだろうか。

6. おわりに

インタビューでは、インタビュアーとインタビューーの関係といったローカルなコンテキストが

織り込まれて語りが形成される。つまり、インタビューが誰に対して、いつ、どこで、どんな目的を持って話しているかが語りの特性を束縛する。また、インタビューという場面は、インタビュアーが質問し、インタビューがそれに答えるという役割が付与されているため、多くの場合、主導権を握るのはインタビュアーであり、インタビュアーが事前に持っていた前提が持ち込まれ、バイアスとなることがある。

今回報告したインタビューにおいて、インタビュアーである筆者は、「彼女たちはベトナム人である」「外国につながる子どもは学校生活で苦勞したはずだ」「外国人であるゆえの差別経験があるはずだ」「しかし外国人と日本人は平等でなければならない」という前提を持ち込んでいた。3人の協力者は、インタビューという場の非対称的な関係性ゆえに、また、筆者がかなり年上の大学教員であるゆえに、概ね上の前提に合わせて語りを作ってくれたと思われる。しかし、前提自体が問われた場面がなかったわけではない。

例えば、筆者がニイに対してどんな時にベトナム人であると意識するかと尋ねた時、ニイはためらいを見せた後、ベトナム人だと意識するというより日本人ではないと思う時はあると答えた。また、ベトナム人だから損をしたと感じたことがあるかという問いに対してマイは、外国人だからいいことはいっぱいあると答えた。これらは、筆者の前提を問い正す発話であり、自分の前提を押し付けようとしていた筆者に反省を迫るものであった。

筆者が行ったインタビューは、それ自体、エスニシティを顕在化させ固定化する談話であり、マジョリティーから見たマイノリティーのイメージを押し付ける談話になる可能性がある。そして、不平等な関係性を再生産する社会的実践になるかもしれない。インタビューでの相互行為の批判的な分析によって、日本人と外国人の関係がどのように築かれるのか明らかにすることも今後の課題である。

-
- * 1 海路によって諸外国に避難したインドシナ難民をボートピープルと呼ぶ。日本では「ベトナム難民＝ボートピープル」というイメージが強いが、実際には陸路を通じて隣接国に逃れたランドピープル、海外に家族がいる場合、空路によって難民としての保護を求めたエアピープルも存在する。
 - * 2 出典は難民事業本部のホームページ(<http://www.rhq.gr.jp/japanese/known/ukeire.htm>) (2015年11月11日閲覧)
 - * 3 日本政府はこれまで外国人政策として、どのような外国人をどのように受け入れるのかに関する政策を、主として出入国管理法の改定によって実施してきた。しかし、受け入れた外国人を日本社会の中にどのように統合していくのかに関しては、「多文化共生」というスローガンが掲げられているものの、統合政策としては実現されていない。本稿では、統合政策に関する議論の材料となることをめざして、日本に住む外国人の側から見た社会統合の実態を明らかにしたい。
 - * 4 取り出し授業とは日本語を母語としない児童を在籍学級から「取り出し」で、日本語の指導をすることであり、国語や社会の時間が取り出し授業に充てられることが多い。入り込み授業とは、在籍学級に支援者が「入り込んで」日本語を母語としない児童に対して通訳・学習補助などの支援を行うことである。
 - * 5 認定NPO法人多文化共生センターの報告によると東京都で在籍割合から算出した外国にルーツを持つ生徒の高校進学率は50%を下回る。
 - * 6 ここではエスニシティをベトナム難民2世が自分を日本人とは異なる集団に属していると固定し、日本人からも異なっていると同定される過程であるとする。

- * 7 清水（2006）は小学校で外国にルーツを持つ子どもたちがよく分からない者どうして固まり、日本人生徒と棲み分けること、つまり、自ら教室の人間関係の「周辺」に位置づくことによっていじめを回避していると指摘している。

参考文献

- 太田晴雄『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院、2000年
岡崎眸監修『共生日本語教育学－他言語多文化共生社会のために－』雄松堂出版、2007年
荻野剛史『「ベトナム難民」の「定住化」プロセス』明石書店、2013年
梶田孝道他『顔の见えない定住化－日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク－』名古屋大学出版会、2005年
川上育雄『越境する家族－在日ベトナム系住民の生活世界－』明石書院、2001年
清水睦美『ニューカマーの子どもたち－学校と家族の間の日常世界－』勁草書房、2006年
戸田佳子『日本のベトナム人コミュニティ－1世の時代、そして今－』暁印書館、2001年
中川康弘「多文化共生社会の構築に向けた外国人の関わりに関する一考察－ある1人のベトナム難民2世の語りから－」
『教育科学研究』27、11－17、2013年
ノーマン・フェアクロウ『言語とパワー』貫井孝典他3名訳、大阪教育図書株式会社、2008年